

トマス・アクィナスにおける認識的正当化と真理

上 枝 美 典

序

本論の主張は以下の通りである。トマス・アクィナスの認識論には、現代認識論の観点から見ても注目すべき論点が含まれている。しかしそれは、従来言われているような、信頼性主義や外在主義ではない。むしろ、個々の信念の性質よりも集合としての信念体系全体の性質に注目する点、さらにはそのような知の体系が宿る主体や共同体を視野に入れる点である。

近年、トマス・アクィナスの認識論を現代の観点から評価する試みがいくつか行われている (MacDonald 1991, 1993; Stump 1992; Jenkins 1997; 川添 2002 など)。これらの研究は、認識的正当化という現代的な視点からテキストを読み直すことによって、トマス・アクィナスの思想の意義を新たな文脈の中に探ろうとするものである。

この種の試みには、常に思想的文脈の違いをどう処理するかという問題が付いて回る。たとえばアクィナスにおいて、知は認識的正当化、内在主義、基礎付け主義といった概念や用語で語られていない。したがって現代的関心から見ると、アクィナスは認識的正当化の問題を論じていないように見える。逆に、アクィナスの認識論に慣れた目から見ると、現代認識論は、「知識」という概念の分析、特に「正当化」概念の明確化に重点を置くあまり、認識におけるもう一つの重要課題である「真理」の問題を素通りしているように見える。

基本的に、この困難を乗り越える道は、相互に自らの文脈依存を自覚することにあるだろう。実際に表明されたある思想をDとすると、Dは、その時代の思想的文脈Cと、Dを生み出した思想家の視点Pとの相互作用の結果である ($D = C \times P$)。たとえばアクィナスの思想は、アクィナスが生きた時代の思想的状況と、思想家としての

アクィナス個人が持っていた視点との相互作用の結果であり、同様に、現代認識論は、現代の思想的状況と、この議論に参加する人々の視点との相互作用の結果である。このようにDとPを分離することによって、古典研究が本質的に持つ二つの側面が明らかになる。一つは、古典的観点から現代を読み直すことであり、もう一つは、現代的観点から古典を読み直すことである。どちらの方向も古典研究に必要なだが、本論は基本的に前者に属する。すなわち、われわれの意図は、現代認識論の議論の中にトマス・アクィナスの視点を生かす道を探ることである。

アクィナスから認識的正当化の理論を抽出する

この節では、認識的正当化にかんする理論をアクィナスから抽出することを試みる。上述のごとく、表面的に見る限り、アクィナスは認識的正当化を論じていない。しかし、このことから直ちに、アクィナスの思想に認識的正当化の問題が含まれていないことは帰結しない。現代認識論において、知識 (knowledge) は「正当化された (justified) 真なる (true) 信念 (belief)」という三つの要素に分析される。したがって、ある理論において、真である信念が知識に満たないと考えられているならば、正当化という認識的価値の存在が認められていると判断できる。ではアクィナスにおいて、真である信念は、知識と言えるだろうか¹⁾。この問いに対して、アクィナスはおそらく次のように答えるであろう。「真ということ、知的徳の完成そして第一真理の分有という意味を込めて理解するならば、真なる信念は知識である。しかし、ある意見 (*opinio*) が偶然に事物と一致しているという、単にそれだけの形式的な意味で真だというのであれば、真なる信念 (*vera opinio*) は知識ではない」。

現代認識論が信念の正当化を論じる場合、「真理」の問題は、「とりあえず対応説を採っておく」という処理のしかたになる場合が多い。それゆえ、たまたま偶然に事実を言い当てた場合にも、その信念は「真」と見なされる。しかしアクィナスの文脈で理解される「真 (*verum*)・真理 (*veritas*)」は、そのような単なる対応関係ではない。真理は人間に備わる認識能力の完成であり、第一真理の分有である。したがって、「真」を現代的な文脈で理解する限り、アクィナスの視点から見ても、真なる信念は知識に満たない。知識とは、単にたまたま事実を言い当てている臆見以上の何かである。その「何か」を認めている点で、アクィナスの認識論にも正当化理論が存在すると言ってよいであろう。このように見てくると、現代では「正当化」という言

葉で分節される議論が、アクィナスでは「真理」という言葉のもとに未分化のまま含まれている可能性が浮かび上がるのである。

アクィナスが、信念と事物との対等関係という真理の形式的側面を最も明示的に論じるのは、真理の定義を扱うときである。たとえば、その代表的な箇所である『真理論』(De Veritate) 第1問第1項主文で、アクィナスは、真理を定義する際の視点を三つ示している。それは、(1) 真理の基礎としての事物の存在、(2) 真理の形式的性格としての知性と事物の対等関係、そして、(3) 真理の結果としての認識である。このうち、第二の「対等」要素は、既に述べた現代認識論における「真」にほぼ相当する。つまりアクィナスにおける十全な「真理」の意味には、(2)の「対等」要素の他に、(1)と(3)の要素が含まれている。したがって、(1)と(3)の要素が、真なる信念と知識との間にあるギャップに相当すると考えることができる。

(1)は、認識の成功を保証する存在論的・形而上学的基盤である。すべてを認識しうるものとしての「魂」と、それに応じる可知性を有する「事物」との間には、前者は後者を認識しうるものとして、また、後者は前者によって認識されうるものとして存在するという、存在論的・形而上学的関係がすでに成立している。

(3)は、事物と知性の形式的な対等関係の結果として生じる認識である。これは「知性の真理」などと呼ばれる、認識能力の完成としての「真」である。アクィナスにおいて、「真なる信念」とは、単に事物と対等関係にある信念ではなくて、認識能力の完成として生み出され、しかも、形而上学的関係としての真によって事物と対当することが保証されている信念である。

したがって、アクィナスにおける真なる信念が、現代的な意味での真なる信念に付け加えているものとは、(1)外界の事物の認識という事態の成立を保証する形而上学的枠組みと、(3)当の信念が、真理を獲得しうる認識能力の完成として適切に生み出されたものであるという要請の二点である。

以上から、アクィナスにおける知識の定義を現代的文脈の中に再構成すると、少なくとも最初の近似としては、次のような定義が得られるであろう。

【定義 α 】

Sがpを知っているのは、以下のすべての条件を満たすとき、そのときに限る。

1. Sはpと信じている(受け入れている)。

2. p は事物に対当する（現代的な意味で真である）。
3. S は、外界の事物を正しく認識しうることが神（≡この世界の設計者）によって保証されている世界（環境）の中に存在する。
4. 1 は、S の認識能力が適切なかたで完成された結果である。

定義 α の位置づけと評価

かつて E・スタンプは、アキナスの認識論を「信頼性主義の要素を持つ神学的外在主義」と評価した (Stump 1992, 158)。定義 α は、確かにこのように評価されうる側面を持つ。まず、外在主義についてだが、認識的正当化における外在主義とは、認識的正当化における内在主義の否定である。この分野での内在主義とは、認識主体 S が抱くある信念 B が正当化されるのは、B が正当化されるすべての理由を S が所有しているときに限られる、という主張である。たとえば S が数学を研究し、B という信念（定理）を得たとする。このとき、B が真であるすべての理由（証明を構成するすべての命題）が S にとって明らかであるとき、そしてそのときに限り、S は B を信じることに於いて正当化される。この例は、認識的正当化が内在的に解釈されるべき典型的な事例である。外在主義は、この内在主義があまりにも厳しい要求であるとして否定する。つまり外在主義は、人々が日常持つ経験的信念などの場合には、B が真である理由の中に、S が与り知らないものがあるにもかかわらず、もちろん基準を緩めたままでは妄想や幻覚も正当化されてしまうので、そこには一定の条件が定められる（対象との適切な因果的連鎖の存在や、信念を生み出した能力の信頼性など）が、それらの条件は第三者的な視点から事実として成立していればよく、S が自覚している必要はない。

さて、定義 α に戻ると、ここに表現されている基本的なアイデアは、神によって真理獲得能力としてデザインされた認識能力が、適切な環境において適切なかたで完成した結果、ある信念を生み出し、そしてその信念が実際に真であるとき、それを知識とみなす、ということである。アキナスにおいて、認識能力の完成は、質料・形相論に基づくアリストテレス的な自然学の記述（現代で言えば自然主義的な記述）によって説明されるが、この説明は高度に専門的なものなので、これらを自覚できるのは当時の哲学および神学を学んだごく一部の専門家に限られるであろう。したがって、もしもアキナスが内在主義者であるならば、それら専門家の信念以外は正

当化されないことになる。しかし、アクィナスが経験知の範囲をこのように限定しているとは考えにくい。それゆえ、3、4にかんする詳細は、認識主体Sによって自覚されていないとよいと解するべきだろう。したがって、信念を正当化するすべての要素が認識者に自覚されていなければならないという内在主義の要求が明示的に含まれていないという点に注目することで、アクィナスを認識的な外在主義者と解釈する余地が生じる。

また、信頼性主義は、ある信念が正当化されるのは、その信念が信頼できる認識能力によって生み出されたときに限ると主張する。たしかに、「正当化」を「信頼できる認識能力によって生み出されていること」と考えるという、その点だけを取り出して見るならば、アクィナスの中に「信頼性主義の要素」を見ることは可能である。なぜなら、アクィナスは、上の定義 α の3および4が示すように、信念が正当化されるためには、この世界の設計者すなわち神によって信頼性が保証された認識能力が働き、また、そのような能力が正しく働くようにこの世界が調整されていることを必要条件として認めているからである。以上のような点に着目して、スタンプはアクィナスの認識論を次のように評価する。

アクィナスの考えでは、われわれの認識能力は、われわれを、神がそうであるような真理の認識者にするというはっきりした目的にしたがって、神によってデザインされている。特に、われわれが感覚や知性を、神がデザインしたとおりに、適切な環境の中、つまり神が人間をそこへ向けて造った世界の中でそれを使うとき、それらの能力は絶対的に信頼できる。(中略) 彼のこのような考えを見れば、彼の知識論を、信頼性主義の要素がある一種の外在主義と見なすことは合理的だと思われる (Stump 1992, 147-148)。

しかし、このような評価には問題がある。まず信頼性主義の特徴は、認識能力の信頼性を正当化の必要条件とする点にあるのではなく、むしろ十分条件とする点にある。言い換えれば、能力が信頼できるのであれば、それによって生み出される信念は、それだけで正当化されている(そして、それが真であれば知識である)という主張が信頼性主義であって、正当化された信念を所有するとき、それが信頼できる認識能力によって生み出されていることが必要だ、という主張は、厳密な意味での信頼性主義で

はない。

もし仮に、このように薄められた意味で信頼性主義を考えるならば、思想史の中に信頼性主義でない認識論を見いだすことは困難であろう。たとえばE・ソウザが論じているように、古典的基礎付け主義にして内在主義の典型とされるデカルトですら、その認識能力（理性）を完全に信頼できる能力と見なす点で、信頼性主義者と見なすことができるのである²⁾。

したがって、トマス・アクィナスの中に信頼性主義の「要素」が存在するという指摘は、些細な意味で真ではあるが、ほとんど無意味である。もしも信頼性主義との関連でアクィナスを論じるのであれば、アクィナスが認識能力の信頼性だけで認識的正当化は十分だと考えていたかどうかが問われなければならない。そしてこの点については、あとで見るジェンキンスの議論も示しているように、否定的に答えるのが妥当であろう。したがって、アクィナスが信頼性主義者であるという評価は、些細な意味で真であるか、あるいは、間違いであるかのいずれかである。

また、アクィナスを「一種の外在主義」と見なしてよいかという問題は、より慎重な扱いが必要である。そもそも外在主義は、内在主義に対するアンチテーゼなので、内在主義が存在してはじめて成立する思想的立場である。端的に言えば、外在主義とは「内在主義は間違っている」という主張なのである。前述の、真理論から抽出されたアクィナスの正当化理論の中には、たしかに内在主義的要求が含まれていない。しかし、この事実は、現代であれば「あえて含んでいない」と見なすべきかも知れないが、デカルト以前のアクィナスについては、「この論点を明確化する必要性を感じてない」と見なすのが妥当であろう。それゆえ、外在主義についても、それをアクィナスに帰することは適切でないように思われる。

アクィナスの認識論：scientiaの重要性とその評価

アクィナスが知や認識について思索した場所は、現代のそれとは大きく異なる。それは本質的に、神においてである。認識というものがもっとも完全な姿で働くのは、アクィナスにとって、日常の経験的信念の獲得においてではなく神においてであった。神におけるそのような完全な認識はscientiaと呼ばれ、scientiaこそがあらゆる認識の範型であった。もちろん、人間が神のscientiaの全体像を把握することができるわけではない。しかしアクィナスは、アリストテレスから学んだ最高の知の形態として

の *scientia* の周辺に、彼の認識論を展開させたのであり、またその延長線上に、神の知、至福、そして信仰といった神学的な「認識論」を形成していったのである。この点で、次のマクドナルドの記述は的確である。

彼（アクィナス）の認識論が、厳密な *scientia* についての彼の説明と同じ範囲にわたると考えるのは誤りである。しかし、彼は、彼の理解する厳密な意味での *scientia* を、認識論的正当化のパラダイムと見なし、他の種類の正当化が、それによって理解され、また、それが基準になって判定されるモデルと見なす。その意味で、*scientia* についての説明は、単に彼の知識論の一部ではなく、その根本である（MacDonald 1993, 177）。

ただし、*scientia* 論の中にアクィナスの認識論を読みとる解釈には、一見して明らかな問題点がある。それは、知識の一般的モデルとして、*scientia* が特殊すぎるという点である。

たしかにアクィナスは、*scientia* が（1）完全な認識、つまり、（2）真理の完全な了解であり、（3）原因の認識であるとし（*In I Post*, l. iv, n. 32）、さらに *scientia* は（4）確実な認識であるので、（5）その対象となるものは、他のものではあり得ないもの、つまり、偶然的ではなく必然的なものに限られる（*In I Post*, l. iv, n. 34）、と述べている。主として経験的な知識を扱う現代認識論から見れば、このような *scientia* は、きわめて狭い範囲で成り立つ特殊な知のあり方に見えるのも当然である。このようなことから、たとえばスタンプは次のように論じる。

したがって、これらすべて理由から、*scientia* を knowledge と訳すのは明らかに間違いであり、それゆえ、アクィナスの *scientia* 論を、knowledge 論だと解釈するのはさらにひどい間違いである。したがって、彼が *scientia* について言う必要があることを、knowledge の本性や構造についての見解を表現するものと見なすことはできない（Stump 1992, 136）。

scientia の外延が、現代認識論が扱う knowledge の外延に重ならないばかりか、そのきわめて限られた領域を占めるという点は認めてよいだろう。したがって、アクィ

ナスの *scientia* 論が、そっくりそのまま彼の認識論だと解釈することは、スタンプが言うように確かに誤りだと言ってよい。しかし、先のマクドナルドの言葉を繰り返すが、アキナスが「認識」ということで、根本において何を考えていたかということを理解するためには、彼の *scientia* 論を考察から外すことはできないのである。

ところで、マクドナルドがアキナスの *scientia* 論に注目した結果導き出したのは、アキナスが強い内在主義である (MacDonald 1993, 185-186) とともに、懐疑論に対しては基礎付け主義をとること (ibid., 172-173)、そして、スタンプが言うような外在主義や信頼性主義と見なすことはできないこと (ibid., 186)、であった。アキナスの *scientia* 論にかんする限り、これらの評定は妥当であろう。しかし *scientia* が、現代で言えば数学的な (特に公理系としての) 知に相当することを考えれば、これも些細な意味で真であるに過ぎない。数学的な知が外在主義的に成立することは認められないし (「なぜか知らないがこの方程式は正しい」)、公理と推論規則から導き出された体系である公理的な学が、基礎付け主義の形態をとるという指摘はほとんど言葉の言い換えの域を出ない。したがって、この *scientia* の側面においても、このような現代認識論の分類の中に文脈が異なるアキナスの理論を押し込んだところで、現代認識論にとってもアキナス研究にとっても好ましいことは何もないように思われる。むしろそれよりも、アキナスが *scientia* ということで結局何を考えていたのか、ということに真っ直ぐに目を向けることにしたい。

アキナスの *scientia* : ジェンキンスの解釈

ここで、われわれの探求にとって助けとなるのは、J・ジェンキンスの『トマス・アキナスにおける知識と信仰』(Jenkins 1997) である。ジェンキンスは、前節で見たスタンプやマクドナルドらの議論を含め、現代認識論の基本的な問題に目配りをしつつ、他方で、アキナスの *scientia* 論の中に、これまであまり省みられなかった重要性を認め、それが、「聖なる教え」(*sacra doctrina*) や『神学大全』の根本的性格を理解する鍵であるという説を展開する。そして、その説の中心部に位置するのは、*scientia* 獲得における二段階のプロセスである。

そのような *scientia* を獲得するためには、二つの段階が必要である。第一段階では、その分野における基礎的な概念に精通するようになり、そしてさまざまな原

因を発見し、そうしてどの原因がどの結果をもたらすかを言えるようになる。しかしこれに加えて、第二段階も必要とされる。この段階では、それらの原因が、その人のその分野の思考の基礎となり、諸原因についてのその人の知識が、諸結果についてのその人の知識の原因になるほどに十分に知られるものとなるのである (Jenkins 1997, 4)。

ここでジェンキンスが目し、われわれの関心から見ても興味深いのは、この第二の段階である。*scientia* の獲得は、単にある分野の諸原因を学び、どの結果がどの原因によって生じるかがわかるようになることにとどまらない。それに加えて、その分野の研究が進み、諸原因についての知がもっともなじみのあるものとなり、その他の事柄についての知は、それらの原因についての知が原因となって生じるようになるという、「信念構造の再編」(re-arrangement in our doxastic structure) (ibid., 46) が行われなければならない。

数学や論理学などの一部の分野では、原因と結果の関係が、そのままわれわれの信念体系の構造に反映するものもあるが(つまり公理の方が証明された定理よりも直観的にわかりやすい場合など)、たとえば自然についての *scientia* の場合には、結果の方がわれわれによく知られ、原因が隠されている事の方が多い。そのようなとき、単に、その結果の原因はこれこれである、というしかたで三段論法を組み立てるだけでは十分でない。いったんそのような原因が見つかったならば、さらにその原因についての理解を深め、以前には馴染みがなかったその原因が、その分野でもっとも知られたものとなり、逆に、以前にはよりよく知られていた結果の方が、その原因に基づいて知られるものとなるという、信念体系内部での一種の転回が起こらなければならない。

この転回ないし再編がなぜ必要かという、それは、「自然本性的によりよく知られるものが、われわれにとってもよりよく知られるものとなり、われわれの信念構造が、世界の因果的構造の鏡となる」(ibid., 47) ためである、とジェンキンスは言う。正方形の対角線の長さとその正方形の辺の長さとの比を、正の整数の比で表すことができない、あるいは、両者の長さに共通する単位となる長さのものを見つけ出すことができないという事実は、数学を知らない人を驚かせるかも知れない。しかし、数学に精通した人は、幾何学の原理の方に馴染んでいるので、逆に、そのような単位が見

つかったならば、むしろ驚くのである。

このように、信念構造が世界を映す鏡となるためには、結果から出発して原因を見つけただけでは不十分であり、原因を見つけだした後は、今度は逆に、原因から結果へと道を辿り、原因のせいで結果が生じている世界のあり方そのままに、原因についての知に基づいて結果についての知が生まれるよう、自己の信念構造を再編することが必要なのである。

ジェンキンスは、このような *scientia* の理解をもとに、「聖なる教え」つまりアクィナスの著である『神学大全』の全体的な意図と構造を読み解こうとする。*scientia* を獲得するためには、あらかじめ多くのことを、その分野において学習しておかなければならない。その上で、自らの信念体系の構造を、世界の因果関係を反映するように作り直すことが、*scientia* の獲得には必要とされる。同じように、「聖なる教え」も、それは単なる初学者に対する入門の書ではなく、すでに多くのことを学んでいる専門家を対象に、その信念体系の再構築を促すものである。その結果として、恩寵を得て受け入れられた信仰箇条が基盤となり、その基盤に基づいて他の信念が知られるという、神と世界の因果関係を正しく反映する *scientia* としての「聖なる教え」が得られる。このように、この世的なものがよりよく知られ神についての事柄が知られていないという逆転した信念構造を作り直し、神についての信仰内容がむしろもっとも確信をもって知られたところとなり、それに基づいてこの世の事柄が知られるという、人間の信念体系全体を世界の姿を正確に映す鏡とすることが、『神学大全』の意図であるとジェンキンスは考えるのである。

アクィナスから現代への光

以上のようなジェンキンスの解釈がどれだけアクィナスの意図を正確に描き出しているかについては、テキストに基づいた検証が必要であろう。しかし、わたしには彼が、スタンプやマクドナルドが強調しなかったアクィナスの重要な *scientia* 論の側面を明らかにしているように思われる。

たしかに現代の目から見れば、このような *scientia* 論には重大な問題点がいくつか存在する。まず、近代の機械論的世界観や特に進化論の成功が示すように、この世界の中に計画に基づく合目的な因果関係が存在するという主張はきわめて疑わしい。またヒュームの帰納法批判などによって活性化した近現代の懐疑論は、われわれの信

念と証拠の間にはいかなる論理的な関係も存在しないと論じている。「鏡」のイメージにかんしては、R・ローティの、もはや人類は人間精神が「自然の鏡」でありうるという幻想を捨て、哲学という営み自体を過去の遺物として放棄すべきだという主張（Rorty 1979）を無視することは許されないであろう。

世界が計画に基づいた明確な因果関係を持つことを無条件の前提とすることはできない。また、われわれの信念体系が世界の鏡になるという期待を保証するものは何もない。だとすると、この思想に現代的意義があるとすれば、それは、この思想が認識ということについて根本的に何を考えているかという、その根本のところであろう。それは、認識や認識的正当化というものを考察する際の重点が、切り離された個々の信念ではなく、むしろ認識主体が持つ信念全体の構造、あるいは、そのような信念構造を持つ主体の方に置かれているという点である。

このような、個々の信念から信念主体への重心の移動は、現代認識論の最近の議論においても生じている注目すべき動きである。ちょうど徳倫理学が、善悪の対象を個々の行為から行為者へ移動させたように、ある研究者たちは、認識的正当化の対象を個々の信念から信念を抱く主体の側へ移動させることを提案している³⁾。彼らは、信念がどのようにして認識的に正当化されるかという問題を、個々の信念がどのような証拠を持つか（証拠主義）、あるいは、それぞれの信念がどのような因果連鎖によって生じているか（因果説）というような、信念相互の関係によって説明することをやめ、その信念がどのような認識主体（徳・機能・動機）によって生み出されているかということによって説明しようとする。

すでに獲得された知識を再構成し、われわれの信念論的構造を世界の因果構造を映す鏡にすることを目指す *scientia* は、認識的正当化というものが個々の信念の性質ではなく、信念体系全体、言い換えれば信念の集合の性質であることを示しているように思われる。トマス・アクィナスの認識論は、外在主義や信頼性主義の側面においてではなく、まさにこの知の集会的、構造的把握においてこそ、現代認識論に対する刺激と洞察を与えているように思われる。

参照した文献

- Axtell, Guy. 1997. "Recent Works on Virtue Epistemology." *American Philosophical Quarterly*, vol. 34, Number 1, January: 1-26.
- Axtell, Guy. ed. 2000. *Knowledge, Belief, and Character: Readings in Virtue Epistemology*. Lanham: Rowman and Littlefield Publishers Inc.
- Greco, John. 1999. "Agent Reliabilism" *Philosophical Perspectives*, 13, *Epistemology*. 273-296.
- . 2000. *Putting Skeptics in their Place: The Nature of Skeptical Arguments and their Role in Philosophical Inquiry*. Cambridge UP.
- Jenkins, John I. 1997. *Knowledge and Faith in Thomas Aquinas*. Cambridge UP.
- MacDonald, Scott. 1991. "Aquinas, Thomas (1225-74)." In *Blackwell Companion to Epistemology*. Ed. Dancy and Sosa.
- . 1993. "Theory of Knowledge." *The Cambridge Companion to Aquinas*. Ed. Norman Kretzmann, and Eleonore Stump. Cambridge UP: 160-195.
- Rorty, Richard. 1979. *Philosophy and the Mirror of Nature*. Princeton, NJ: Princeton UP.
- Sosa, Ernest. 1991. *Knowledge in Perspective: Selected Essays in Epistemology*. Cambridge UP.
- Stump, Eleonore. 1992. "Aquinas on the Foundations of Knowledge" *Canadian Journal of Philosophy* Supp. Vol. 17: 125-58.
- 川添信介 2002 「トマス・アキナスにおける確実性について」, 『哲学研究』第 573 号, 26-49 頁。

注

- 1) もちろん、この問いに正確に答えるためには、現代における「知識」「信念」「真理」が、それぞれアキナスのどの語に対応するかを見極めることが必要となる。しかし、それはまた、アキナスの認識論についての正確な理解を前提とするであろう。今は、この後者の理解を手に入れることを目指している段階なので、問いの意味は若干の曖昧さを含まざるを得ない。
- 2) "Rationalism can be viewed as particularly strong reliabilism. What someone like Descartes requires for knowledge and requires of acceptable sources of knowledge or 'route to knowledge' is indeed *perfect* reliability" (Sosa 1991, 211).
- 3) 詳細は Axtell 1997, 2000 および Greco 1999, 2000 などを参照。